

警用車は用法とは少々異なるが、東京都の年末年始総合相談（いわゆる「公設派遣村」）に支援を求めた人たちがめぐる報道や発言に接すると、その言葉を思い出さざるを得ない。

年末年始、オリンピックセンターで対応された人たちが1月4日に1泊だけカプセルホテルに宿泊したのを「甘え」と称した産経新聞、朝と夜の食事数の違いだけから「2000人が無断外泊」と断じた朝日新聞、それらを受けて定例記者会見で「あの程度の行事」「甘えた話」と切り捨てた石原都知事……。年末年始、現場に張り付いて「コトの一部始終を見てきた人間としては、まともな生活が成り立たなくなるまで追い込まれた人た



論壇 湯浅 誠 (内閣府参与、反貧困ネットワーク事務局長)

水に落ちた犬は打て？

だが、「生活できない」という結果に至った」という理由で、いかに壮大なあら探しの包囲網に取り巻かれるのを改めて目の当たりにした思いだった。

現場を切り盛りしていた東京都の職員たちは、一生懸命、運営に当たっていた。最終的な利用者数が誰にも予期できない

たら、それは利用者に対する「説明と同意」だった。私はある利用者の言葉が印象に残っている。彼は私に訴えた。「ここに来た人間は、誰もが助けてもらってありがたかったという気持ちを持っていて。でも、冷たい対応をされていると、自分の中で『ありがたかった』という気持ちが失

きたと了解されたがゆえに、皆で世を徹してカプセルホテルの一部借増しをしたら、「甘え」と報道された。

1月6日、就職活動費として2万円が支給されたため、多くの人が外出手続きのために長い行列のできていた狭き道に受付の順番待ちで寒い中をじっと立ち、一時間

ば、「無断外泊」「行方不明」と、いかにもわずかな現金だけが目当ての「タカリ」の集団のような報道に接する。

掲げの果てには、低家賃アパートを借りて、いつまたホームレス状態になるかわからない住み込み就労を渡り歩く悪循環から今度こそ脱したいと生活保護を利用す

中、誰がやっても完璧なおペレシオンは不可能だった。それは、去年、日比谷公園の「年越し派遣村」を主宰した者の実感でもある。あの時も現場は毎日大混雑だった。

しかし、現場対応の不十分さをなかなかにオプンにできず、利用者への説明が後回しになって、利用者の不安が高じていった。問題があったとして

せていく。それは自分にとっても残念なこと。そういう気持ちにさせないで欲しい」と、彼は人として尊重されることを望んでいた。ただそれだけだった。

結果として1月3日夜に、4日以降の行き先が伝えられず不安が限界を超えた利用者たちの質問攻めがあり、それが人として理解できる感情の動

に一本の最寄り駅までのバスの出発に間に合わない番号札を出さずじまいで飛び乗って、帰りが遅くなったので35人相部屋の避難所生活から一時脱してネットカフェ等に泊まり、施設の連絡先も渡されていないのでどこに連絡したらいいかわからないまま、翌日、面接やハローワークや福祉事務所から戻ってみれないために企業に支給さ

ば、他にアパートに入居できる施策のないセーフティーネットの貧困や、生活保護受給が就労意欲の有無と直接の関係を持たないという事実は無視されて、いかにも就労意欲の低い、ラクして暮らしたい人たちの集まりかのように「甘えた話」と中傷される。



元旦の夜、派遣村の広告が風に吹かれていた

元日の夜、派遣村の広告が風に吹かれていた

費用が雇用調整助成金の1万分の1を超えたことでお金の使い道としての疑問を投げつけられ、一部にでも好ましくない人たちがいれば、それが彼らのすべてであるかのようにならざるを得ない。彼らも、これまで一生懸命働いて、社会を支えてきた人たちであるにもかかわらず、いま「生活できない」という結果に立ち至っているだけで、本能的には「推定有罪」と言わんばかりに、鵜の目鷹の目であら探しをされる。

水に落ちた犬は、水に落ちたがゆえに打てないのだと考える社会の「品格」。今回、編集部から提案された内容は、「2010年を貧困解消元年に」というテーマでの寄稿というところだったが、ここが変わらないかぎり、結局、日本の貧困率はOECDトップレベルを走り続けるだろう、と悲観せざるを得ない。